

2026年4月5日(日)

老球の細道915

青天の霹靂(へきれき)⑦

会津バスケットボール協会 室井 富仁

いよいよ待ちに待った手術の日(1月28日)が近づいて来た。バスケットのゲームに例えれば、前半の良い流れをさらに加速するか、または悪い流れを修正するか重要な3クォーターである。ハーフタイムにおける過ごし方が重要な転機となる。私の場合は、手術前の抗がん剤治療がかなり良好に展開したので(腫瘍が少し小さくなった)、手術もスムーズに行くと思われた。

折しも、手術入院する前日の25日(日)に城北行仁ミニバスからクリニックを依頼された。コーチの佐藤公希氏が私に思い残すことがないようにと忖度してくれたのだろう(笑)。チームには孫も所属しているので喜んで引き受けた。テーマは「トランジションオフェンスにおけるデシジョンメイク(状況判断)」。子どもたち皆熱心に取り組んでくれて、手術に向かうモチベーションを多いに盛り上げてくれた。

手術前に事前検査とオリエンテーションがあるということで手術の二日前に入院することになった。1月26日(月)覚悟を決めて「いぎ病院!」と出かけた。午前中は午後からの大腸内視鏡検査のために2時間かけて2リットルの水分を取り大腸の便をきれいに排出した。午後から内視鏡室に入り、大腸カメラと胃カメラの試練が待っていた。そしたら二つの検査とも全身麻酔で行うということになったので恐怖心は消えた。看護師が旧喜多方女子高校時代に体育授業で教えさせていただいた卒業生で、温かい声で何かと励ましの声をかけてくれた。

大腸カメラを行ったのは転移がないかの確認のためで、異状はなかった。しかし、胃カメラではポリープが見つかったが悪性ではないということであった。2時間位麻酔が切れるまで安静にした。手術前に少しでも体力を落とさないようにと夕食前に30分くらいウォーキングした。抗がん剤の点滴がないから食欲は旺盛で、夕食はすべて平らげた。

1月27日(火)手術前日は映画の題名ではないが『人生で最も長い一日』となった。午前中はX線バリウム透視で胃、食道などのチェック、異状なし。その後主治医から手術の説明があった。妻と長男が同席して話を聞いてくれた。

主治医のH先生は紙に図解して詳しく説明してくれた。食道を切除し、食道の残った上部と胃を引っ張り、食道の代替にする「食道亜全的胃管再建」という手術だった。私は聞いているだけで怖くなったので、ほとんどうわの空だった。合併症や後遺症の説明などの説明もあったが、さっぱり頭に入っていなかった。その時質問したのは「手術は痛いですか?」だけだった。H先生は一言「痛くないです。麻酔しているので目覚めた時手術は終わっていますよ」。

ここまで来たからにはジタバタしてもしかたがない。手術が成功するためには、手術をするH先生を信じ、自分の体力、精神力を信じるのみ。まさしく「信は力なり」。〈続〉